通俗

日本小史

渡邊義方編輯

第四編

下

A-557
8

通俗日本小史四編之下

東京　深崎延房撿閲
渡邊文京操觚

壇浦の一戦敗れて平族悉く海に投ず大魚の腹中に葬らる盡ぬ怨こと横に行く驕る報ひハ因果覿面是ぞ遺念の平家蟹底の藻屑と亡びしハ實に寿永二年三月廿四日なり五月義経宗盛父子を鎌倉に護送せ頼朝諷して自殺を勸む宗盛其意を曉らず只管死罪を宥さんを請へども許さず復西に送りて近江

48-8-39

國篠原に於て父子諸共に斬首せられ名を汚せしも故なる哉宗盛の母時子嘗て一族に去へるやう吾若うまし時嫡子重盛を生し後幾程もなくして又孕り平相國殊更に次男を得まく欲りし玉ひ適れ男子を産めうしと祈る甲斐なく月満日経て分娩せしに女子なりしを如何に相國の望まふ適へんと妾潛ふ腹心の家僕に秘密と呟き示し當時清水寺の片側に傘と商ふ賤の夫婦ぐ妾と同時に男子を生めるあるを幸ひと幾干の黄金と與へて交換せり人とな

せしに宗盛なり賤しき素生に是非もなや兄重盛に及ばざるあと数百歩心怯まして死を畏る武門に似氣なる匹夫の本性我家名を汚さん者に宗盛との事なりしゆえ由なる事をしてうまと今更悔やれどもまうみの甲斐なる繰言なり返し頻に嘆息しまし是に至りて其言の偽りなるを知ると云此説或に信るうん清盛の梟雄にして何ぞ怯弱の宗盛を生む初め義経の西海に在るや頻る頼朝の節度に従ぐんぞ梶原景時素より義経と中らく金とも

鑠して舌の剣研ぎまして景時へ折を得たりと譏
訴の佞辯頼朝もまた義経の才幹を忌憚り除かんや
と思ふ箭先市ゐ三虎を出その譬へ牆に聞くや兄弟
宗盛以下の俘虜を率ゐ凱陣ゐせーと頼朝へ鎌倉に
だゐ入らんと許さぞ義経大に驚き書を大江廣元に寄
せて情を陳ぶ誠文辭に顕ーらど頼朝の疑團解ゐ
由なく何等の沙汰さんなくに望み失たひ義
経を心密に憤う怏々として京師に帰る此時行家も
また頼朝と怏まぐ憂へ同じ叔父と甥深く俱ゐ相

結び兄頼朝を滅さんとの企謀あると聞えーくば頼朝
即ち南都の強僧土佐坊昌俊を京師ゐ遣をー夜に乗
じて不意に起う義経ぐ堀川の館を襲ふ思ひ設けぬ
宿直の人々に の時僅に七人の〻宵に過せー酒の醉
まぐ醒やら ぬ義経へ愛妾静と枕を併べ添寐の夢を
驚うた耳を貫く鯨波の声我破とたうゐ跳起きろ
閨の戸蹴開き寝衣のまく兵輩起よと声の下さー
心得て傍ら静ぐかくる緋威の鎧をざっくと被る
間も遅ーと頭に戴く兜の緒をとくく結ぶ火急の

宗高ゲ一箭
両軍の魂を
奪ふ

戎装弓矢手狹く馬に跨ぐ門を開くや忽ちみ群
ぐる寄手の中央へ面もふらず突て入る主従合せて
たゞ八騎當るに任せず薙倒す古今無雙の挣きみ
寄手い思ひ辟易み一十反だに退き去るその折
うる義経の従士を追々み異變を聞て馳集まり行
家もまた来り援ひ遂み昌俊と撃取ね義経行家直
に法皇の宮殿に至り變と奏して且頼朝を討の院
宣を請ふ法皇已むを得ずして許を備い逆状
現然たり討べき機會とそ来まると頼朝親ら諸將

を統べ大軍を率ゐて西上をかくと聞る義経行家
謀る所やはた皇たりうん俱に船み上りて西海み走ら
んと大物浦ふかく折しも颶風俄み吹き起り激浪
怒濤天に漲り見るく船体今いまや碎くるうと思ふ
をう帆檣折れ舵い裂け辛くも其処を乗拔しろ
どかる風雨に行家と相失し爰より再び上陸し吉野
山に潜伏なりをみそ頼朝進んで駿河なる黄瀬川まで
至りしが義経既に逃るくと聞き兵を引て鎌倉み還
り朝廷已れを討ぞるの院宣を下さを以て縷々寃を

訴へて止まぬ法皇急ぎ諸州に命じて義経を索め
しむ頼朝もまた義経の身を贖ふに千金を以てし嚴
しく捜索ありしかども吉野に匿れし義経主従道士
の姿と身を窶し諸國勸進の体に扮ちさまして行衛
を陸奥のいづくに露ける旅衣昨日は三軍の將帥たり
今日は蔭の落武者と栄枯得失無量の艱難北陸道
より落てゆく心の中ぞ如何あらん推測らるるに痛ま
しく十一月頼朝奏して諸國に守護地頭を置き家人
の功労ある者を薦めて守護地頭となし而して自ら

あるを統轄せしめ因て世人頼朝を稱して六十六
國の總追捕使といふ義経は辺土くて陸奥に
落止まり曩に養育せられし國主藤原秀衡が許に
托し潛ひて在ること三年餘り春と過ぎ秋と暮て
文治五年の春を迎へ憂き星霜を送りて今年も爰に
暮るると思へば胸のみ悒ばれて春なれど寒き衣川の
館に忍びて在るうち去年の十二月秀衡は老後の
病苦漸々に重くなり哀れ果敢なき終焉の一齣吾子
泰衡忠衡に義経を守護しまゐらせ時機を謀りて

當國の鎮守府將軍とゐせよゝし努忘るゝなと遺命して遂ゝ空しくなりしうべ頼む樹蔭み雨洩る心地折も折とて朝廷より義経を誅戮せよといとゝも惶き勅命と背くを違勅の罪重く上ゝ對しく不忠あり去とて義経を討取らゞ親の遺命を奈何ゝせん忠を破らゞ孝を捨ゞ忠義全ゝ所置のなりがたしやいと泰衡兄弟額を病し肝と碎き案ゝ出せし奇代の計策兄弟互ひゝ咀きゝ頻りみ點頭く心のうち善ゝ悪うゝ白雪の世い春みゞ寒國の肌を貫く北風凛烈

即夜遽ゝ軍馬を催ふし急ゝ義経が籠りゐる衣川の舘へ襲ひかゝゝ火を放ちく焼立るよゝやと思ひし泰衡等が變心ゝして押寄せし表裏反覆薄情き挙動さもかくべあるまんぞと心い矢竹ゝ迅れども堅い低く味方い少し義経そゞの名將も勢ひ盡き力極まり稍一方の血路を開き逃まくまゝ遣も過ぎ群がりかゝる寄手の兵卒物々しゝと辨慶が打振る薙刀刃尖きるどく矢庭ゝ四五人斬斃せその間み義経たゞ一騎海岸

をさて騎接けつ遥よ後を顧るべ是まで逐来る敵もあー今い斯よ〜覚期の面色馬より飛うと下立て沙の上よ端座あー右手り短刀を抜持き咄嗟左の照腹へ突立んとせー程あそなる那時遅く時迅一筋の征箭飛来り短刀持たる義経が右の腕を射削ッたり是いそも什麻みと驚く間もなく何の間みやら漕寄るん岸み繋りー兵船数艘その勢かよそ百五十騎岸み下り立つ其隊の頭人近づくまーみ見てなるべ是即ち別人あ〜ぞ泰衡の弟忠衡なり當

下忠衡義経の側よ進ま曰るやう気配なるる九郎殿我ちの事の為体まぞみ不審よ思ふらあとをうるるい我兄弟の意中を語るよ由もあー暴み同肥心と合せいうを君と落ー〜せ親の遺命を守りたく去て朝命と背くみ術ふーと止と得ざるよ出たる一策陽よ衣川の関を襲ひ君の出るを待設け船うて救ちん豫ての手筈兎ても角ても右幕下の讒忌のうちみ身と措たまへい實よ危きの限りよそ去るべ此なる船ようち乗り蝦夷地をさて落のび

昌俊夜に乗じて美経が堀川の館を襲ふ

たまへ死は一旦なる易く生を難しと古人の金言君戰死と流言し後の始末は我倅が兒ふも角ふも計らいんいざ疾々と迫立る義あり勇ある忠衡が死を止めて肝向ふ心の限り說き盡すを義經聞て潸然と涙たをしる露の玉碎けて元の土礫と成る成らざるは天は在り是非も行て世のたくぎまひ人の好意を無ませドと兎角の應たる間も遲しと乘れを搖めく兵船は陸と水との生別を言へ言ぬは丈夫が涙のこと込む訣別順風は眞帆なれ一瞬千里北を指

てぞ駛りもく忠衡海岸は佇立て島かくれもく船影を暫し見送り莞爾とうち笑をかくてを最早心易しと乘捨たまし義經が馬はうち乘り一目散衣川へと馳せ帰るべきや戰ひも收まりて筭を乱して斃るを伏を敵の死骸の數ある中より義經は肖る首級を擊取りて紙鎌倉は送致してその恩賞弦乞ふたりる育擊猜忌の頼朝もかくる秘計のありぞとも毫たりとも知らざるは況ちや遠路をとるくと送致越したる首級さへも春の暖気は腐敗しく

真偽を解くべき由もなく然るとも頼朝あの時よ
りて泰衡兄弟と滅ぶべき後必ず大害なりんと吾
弟を殺して賞を求む大逆無道の名を拓ー頼朝親ら
大軍を將ゐて鎌倉を発ー奥羽を伐と聞えーくを斯
なりんと豫てより思ひ設けー泰衡兄弟まをーい防
ぎ戦ふものうー衆寡敵せず戦ひ負て泰衡兄弟を
言ふも更なり一族郎黨数を竭ーて或い撃ま或い自
殺ー奥羽悉く平ぐり頼朝鎌倉を発ーてより爰に至
りて四十餘日宇内全く平定せーゆえ頼朝則ち功

臣を従へ建久元年冬十一月東海道より上洛ー京師
六波羅ふ旅館を構へ先づ法皇に拜謁ー即日入朝ー
て天機を伺ひ畏くも龍体に咫尺ー奉まつる帝叡感
浅からぬ権大納言兼右近衛大將に補せらる頼朝面
目身に餘り再三君恩を拜謝ー同く十二月鎌倉ふ
帰る三年七月詔りして頼朝を以て征夷大將軍と
なす是より先後白河法皇崩御ーたまへり御壽六十
有六該法皇い譲位の後二條六條高倉安德の四帝
より當時後鳥羽帝の御代に至るまで五世の間院

中に在りて政令を聽たまひ信頼清盛義仲等がたゆ
に天下い乱れて麻のおとく僅に頼朝ぞ武功に倚り
社稷を安んドたまひしーっど一得ひ失あり一
害去て一弊来る王室の政權武門に帰せしも時勢
止を得ざると言まーし時に建久四年秋八月十日餘
の事なりき鎌倉中俄に騒動しく只今合戦始ま
りぬと罵騒ぐ声と大方あらぎ門の沸ぐ如くなりを
和田佐々木畠山下河邊千葉小山結城などの餘譜代
の鎌倉武士大級の下に身甲して皆営門警守護し

たる人馬整々として近づく至うぎ縁故を尋ねる
に頼朝の舎弟範頼隠謀の企てありしく伊豆の修
禅寺へ推問らるをその臣某氏等濱の宿なる館に楯
籠り討手の軍兵と血戦して戦死をしたれば為ん然
るど左まをの事ふもいらず孫を馳せ集まりし面々い
日暮て孰るも退散せり却説参河守範頼い左典
厩義朝の六男にして遠江州蒲の郷に生るーうべ人
呼で蒲冠者とう源家再興の起原より東軍に馳加
なり幕府の寵用斜るぐ然るべ連枝たるに至

平家追討の大将軍となりたまふ家弟九郎判官義経とともに軍功あり或ハ湖東ニ義仲と討滅し更ニ屋島ニ轉戰して平族を鏖殺しまセ五年の苦戰ニ身を顧ミず三軍の將として敢て士卒ニ傲らず能く頼朝の指揮を奉ド一も恣横なる行狀なく人となり温厚にして慎を尤も深きゆゑ讒者ありと雖ども市ハ三虎と出るニ至らず西海の使者幕府ニ来りて範頼の書を呈する毎ニ頼朝左右を見かへりて義経ハ動もまゝべ己が才学を先にして節度ハ違ふも少なからぬ又範頼ハ彼と異なり久しく兵權を握りなれども功ニ誇らず事細大とゝく予ニ問ふ豈憑もしからずやと只管賞嘆ニ堪ずとぞ怨し程ニ範頼ハ元暦元年六月三河守ニ任ぜらるゝ鎌倉ニ凱陣して濱の宿ハ第を賜ふ金葉玉枝と持囃されて妻子肉臺の盤ニ飽き士卒炙掌の熱き忘る範頼素より篤實にして毫も野心あるハなゝ孫ど忌諱のうちニ身を措て禍害を避るの思慮なし徒ニ讒者隙を得て舌の劍を挾さゝと睦ま

忠衡意中絶
告て義経の自
殺を禁む

しき骨肉の情義を裂くあそ悲しそれかくて今茲の
夏五月頼朝政務の間と得て藍澤富士野に狩倉る
し治世に乱を忘れたる軍馬の足を熟さんとて駿
河路さして打立しそが営中の留守居として範頼と
留めおくしかも此月二十八日の夜曾我十郎祐成その
弟五郎時致と倶に富士野狩場へ推参して父の仇
たる工藤祐経を撃取り剰さへ御寝所ちく乱入し
て駿多の人を害ひたる狼藉の為体鎌倉へ聞えし
い二十九日の真夜中より第一番の注進い綜未ど

臣細なる孫を宿直の武士等その顛末を聞なんぞ今
あるも敵の寄るおとくく劇て惑ひく罵り騒げば範頼
あるを鎮めんとて遣侍へ走り出人々劇て騒ぐべのう
ど幕下い失させたまふとも範頼かくて居るもの我
何條驚くおとやかるべきと穀高やのみ制されども
騒ぎ立たる辟なれば耳あも絶てかけざる折うら第
二番の注進到来して祐成い太刀折そて仁田四郎忠
常に撃ま時致い搦捕まて幕下に恵なるざる由詳細
に聞えしうべ偖い心易しうて人皆やうやく鎮へう

うつ實より口を禍害の門三思一言といひ此なるべし
後ち件の趣きを頼朝聞て悦ぶ原来範頼野心あ
り好や衆人を鎮むる為ふもせよ頼朝いたくもゞみ
と言ねたうの儆言ふく鎌倉へ帰営の後も範
頼より對面せず直ち濱の宿へ追退ぞけ固く出
仕を止めしうべ範頼いたく恐れ惑ひて絶て逆心な
きよしを陳ぜれども尚解ぞこの故ち範頼い三伏
の熱き日も戦々競々として薄き氷を蹈むごと
閉居の庭ち秋を迎へく腸を断つごとかれぬい

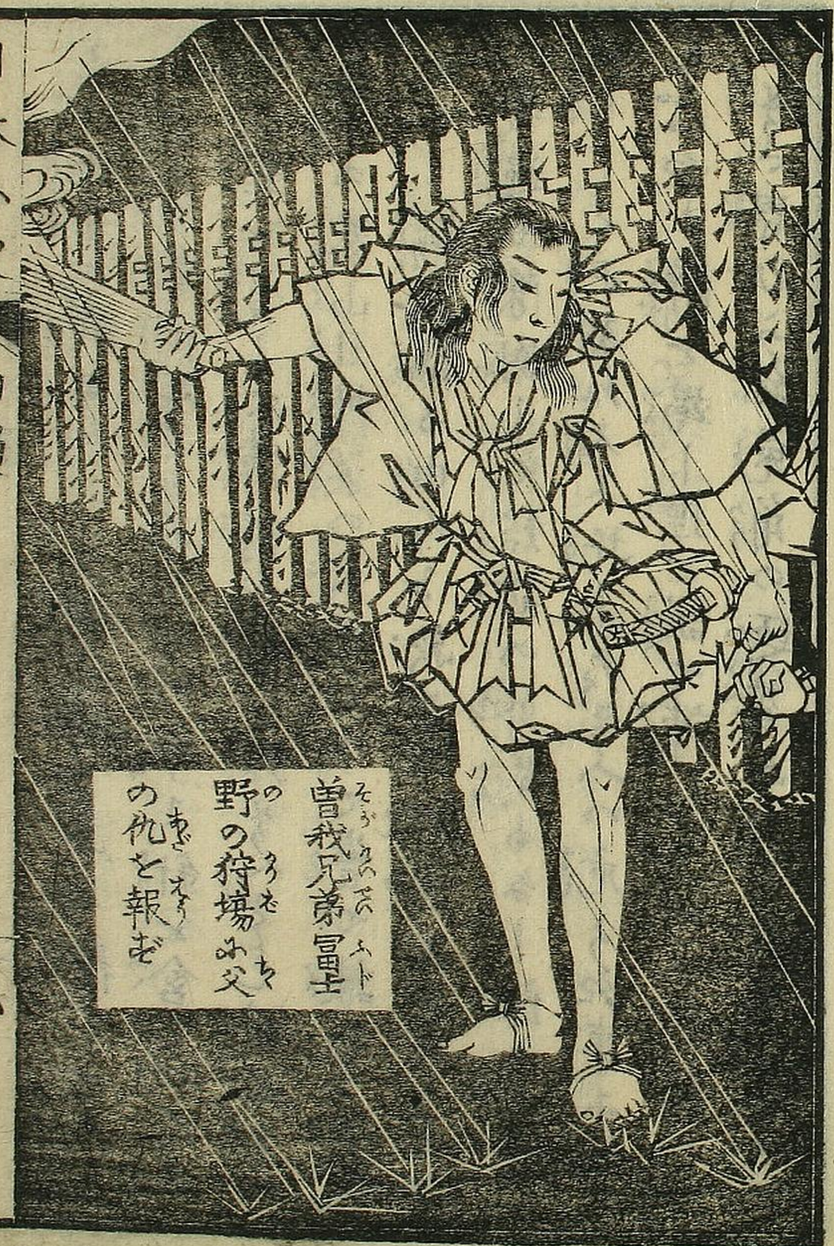
とゞ歎きて堪へ孫て有一日一通の誓書を書寫り
其臣重能を使者として營中ち献ト大江廣元ち就て
進覧と乞ふ頼朝その誓書を見るち源範頼と書さ
るゝ咎めて源姓と濫用まるい渠ち於て公ち過たり
ある誓文の失ちやと廣元ち詰り問いしむ
重能い理義分明ち憚る色なく辯ぜしうど再て何等
の沙汰へなくて其まゝ重能と返されぬ綜ちも難義
ち及ぶを以て範頼まもく劇惑ひて譜代の郎黨を
召寄せて綜の利害と問ふち領国三河へ走帰りて宝

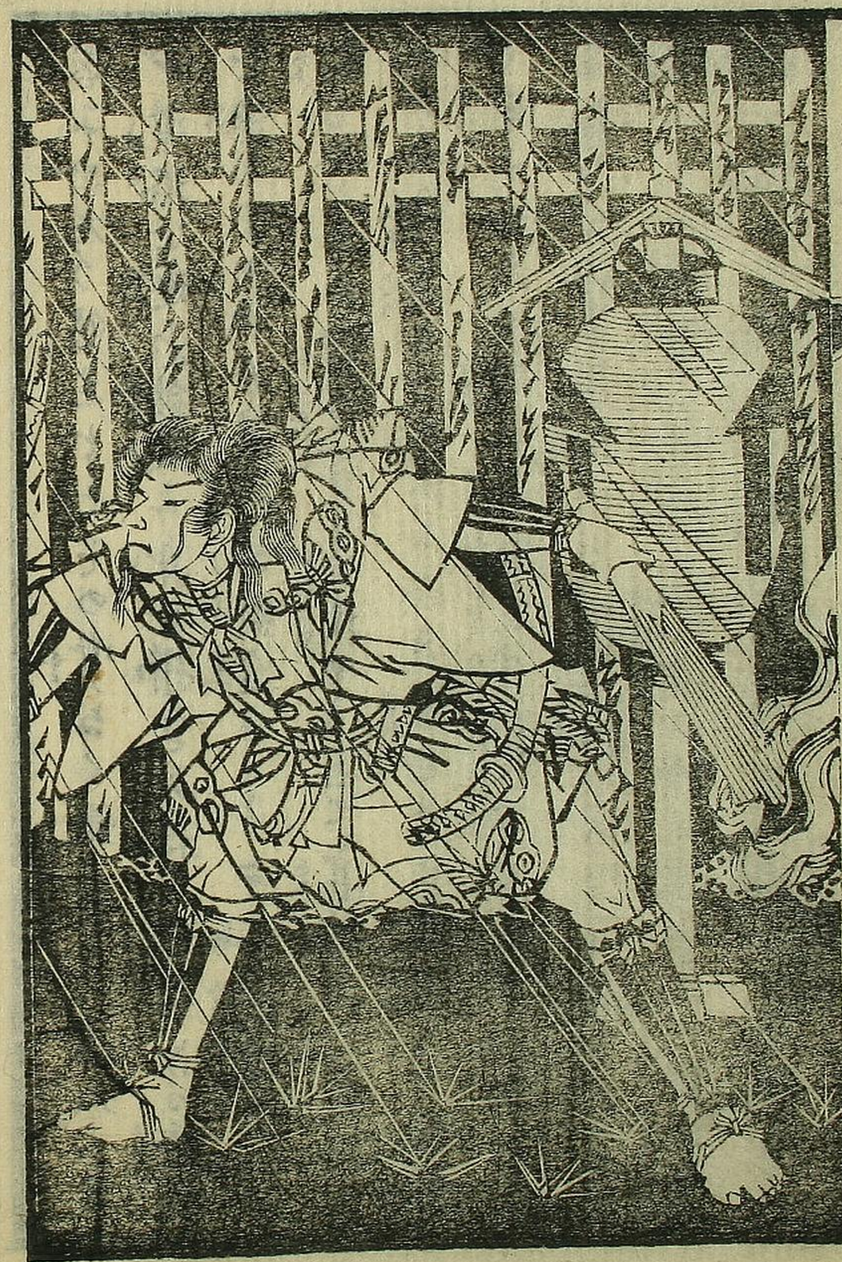
飯の城に楯籠り八郡の衆と倶に安危を倶にせんと
いひ或ひは又幾遍も逆心なき紙陳謝したまへと議を
るゝを衆議紛紜として定まらず範頼是非の境に迷
ひく手を叉めたて在せしが思ふも太吻つた吾露で
うをも逆心なきに今一朝の咎めをおそれ本国へ引退
ぞの謀叛の色を顕はさば讒者の虚言實事となり
て汚名は遂に雪がるゝ想ふに這般の禍害も君
側の悪に妨げられ吾誠の心だに君に通ぜぬ事も
やはらんにはうゝ幕下のおん咎めも左まるの事ふ

いはらざるに欣此等の心を得て後に身の覚悟をまゝ
きなり親しき源氏あれば絲ど密々の事までも
隈なく稟議にたまふに北條父子に優りのなし竊に
愁訴の趣きを執権時政に憑を聞えて緯の虚実罪の
軽重を拷り問ひて大なる助け得つ爲しに誰う此事を
能をべきと問ひて席を見渡せば當麻太郎武弘進み出
北條殿の嬖臣沢田基勝は臣と交際深しおの趣きを
竊に告てまらえて見候らふにやと言に範頼欣然
とそん幸ひのあるまらうに爰に直に彼処へ趣け

ちや疾々と急ー立ると側ふ侍る廣通重能暫しと止らく席を進て異句同音く諫むるやうかの時政い毒蛇ゐり若ー渠ふ依る時い盗賊ふ糧を齎ー讐ふ刃と籍ゞ如ー絶て益なたのみゐ罪と重ね禍害と招ぐ媒介とあるもやせん未ざ曉りたまへるや一條忠頼上總介廣常駿河守廣綱等或ゐ罪なくして誅せられ或ゐ親ゐ世を憤ゐ身を陷ゐ跡を山野ふ埋むるなを遁くゐ御舎弟義経公のおとゝ木曾を滅ー平氏を夷げ源氏一統の世となせーゐて只彼君の武

畧ふ出たり然ども其の賞なく鎌倉ふだふ入らも
ず華洛を逐れ彼此ふ身を措きう移て陸奥ゐる秀衡
を憑ゐーゐて却て將始終全さゐゐ秀衡没後いく
程もなくその遺子等ふ火攻せらもて高館ふ立炯うと
そのふ命墓なく失たまひき去ども義経公の頸擊
て献らせたる件の泰衡兄弟い勅命ふ依て如此せー
ふ却ッてあ且然処とーて大軍を起ーて追討せらも
憐むべー泰衡兄弟遂ふ今泉の柵を破らも一族老黨
數を盡ーて皆悉く擊もゐらゐ君ふも目擊せら


曽我兄弟富士の野の狩場の父の仇を報ぜ



是し昨今の縛ふなん箇様ふ縛こふ反覆して他人
を更あり骨肉たりとも笑こその中ふ針と含こ功なる
者ふ罪を負して薄情や撃せたまへども時政主へ
幕下の泰山且揀梁の武臣として嘗て諫むる氣色
もなく竊ふ謀る由なる欲その奸悪知るべくぞ
只幾遍も陳謝して愁訴の外術もなし恃る大事と
俄ざしく正あた人ふ托したまへい危うた事ふ候ら
ちぐやと辭を竭し理を説て諫むる詞ふ範頼へ更
ふまさ思ひう孫兎角の返答あたを見て當麻太郎

へ歓なぐ吾が君ふどて廣通等ぐ無謀の諫言ふ惑
へされて今更ふ孤疑したまへ時政ぬしへ幕下の腹
心隨一の執權ふまども嫉りのなく譏る人ふし是
その德の過まし処廣通あを知りても愁ふ止
めしへ臣ぐ大功を立んあとを妬む故なり疾く賢慮
を決めたまへと詞を放ちて挾まれば廣通聞て冷笑
ひ當麻へ勇士の稱を得たう弓剣武藝の上なりせ
ば自負廣言も許さる歟し恃る大事ふ臨まくそその
器量ふしもなうざるふ臣を指て無謀とへ足下の

智計覚束なしと言せもいかんを眼を瞋し廣通ら
言ふあらん聴け忠頼廣常等い功よ誇り傍若無人
の挙動多うなるが故よ誅せらる義経公い是ふも
まして強て幕下を追討の院宣を乞受しその逆状現
然う假令百の時政ありとも諫めく救ふべくもい
らぬを撃ったまふも宜ならぬやされば汀よ漕ぐ舟の
梶原景時ふんどくそ逆櫓の遺恨よ堪うねて讒言せ
しと人そいふ時政ぬしふ何ういなるその證拠分明
ならぬい得ぬそい席を立せずと膝着つれど些も驚ぬを景

時おとそい尋常の俊人誰うまを知らざるべき砥
砕い玉の如く大奸い賢者ふ似たり利口の邦家を覆
へまい聖人の恐ろ処足下ふんどが浅き智とりて
測う知るべきおとうと言いまて武弘怒りよ堪ぬ
過言あり瀧口廣通ふれ啓を動うさべその隙を砕放
ちて本事を見せんと服揷の刀の鞘よ手を掛まば鳴
呼がましやと廣通い扇を取て身構へふを此彼面色
朱を沃ぎ綽りで来ぬべき光景よ彼禁めよと範頼が
鶴の一声伺候の面々重鉄ふろ共両人が間よ入りく

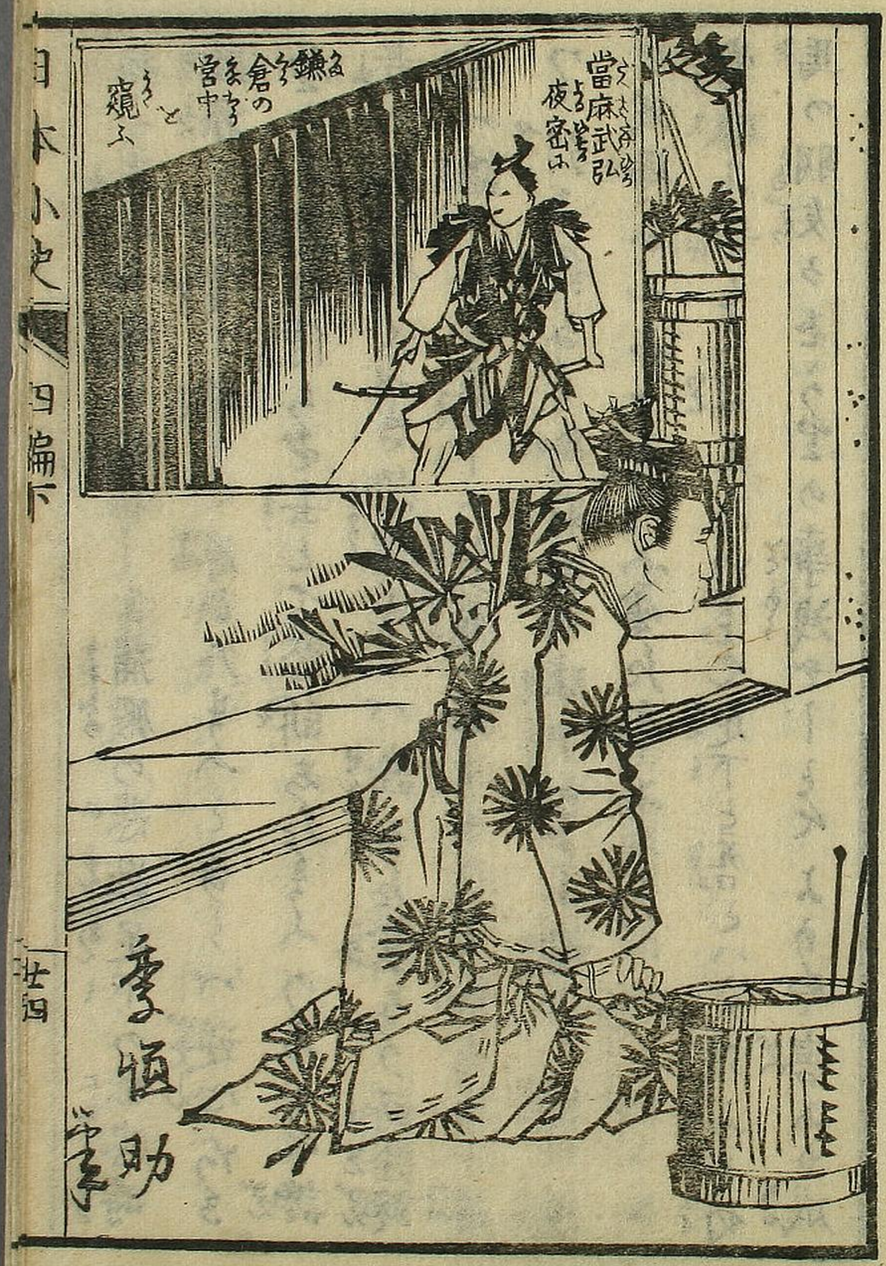
推隅て漸やく左右より引分て辭令〻く理と推て双方を和解しくゞ武弘も廣通も頭を低て默然たり且くして範頼いかの両人のうち向ひ今没等が議する処いづれも道理なりとよりくゞ迭より我意を遂んとて未定の理非を爭ひつゝ身の謹慎を忘れて欲後聞も憚らで執權と誹謗る條廣通ふも似合しうゝ旦武弘が議より任して時政の扶けを求め若し緯成ぬ再び議をべし僉議の旨を心得よと正首より仰せて後堂へと入りよりる當麻い面目身より餘りく思そぐも

莞爾と打笑を廣通い愁然と君の背影と見送りを重ねもいと本意なげより面を合しく歎息しいざ退散と目禮も折目正しき長袴の音さやくと蹈鳴し僉めら共より退出せり恁りし程より當麻太郎武弘い竊より餽物を齎してその夜さを時政が嬖臣なる澤田基勝が宿所より赴きかの密事と密語て主君の愁歎營中の沙汰此と告げ彼と問て只管救ひを乞求むれば基勝い眉うち顰めそへ易うらぬ事なりと足下の誠忠默止がさるさふ主人閑暇の折と見合せ何とう探り見候えん

両三日を隔て来たまへと懇篤に諾ひしうべ當麻は斜めならず歓びて尚再三頼みあれ更闌て已が宿所に還り明るを遅しと待兼て彼方の首尾は斯々と範頼に告るを聞き参洲ふをく嘆賞して則ち當座の褒美として伽羅丸と名けたる七首を賜ひ是は亡父君義朝公の秘蔵の物にて幕下もよく認たまへ吾家の重宝なれども汝が才覚を賞するの餘りあの侭に取まるゝ事成り厄を釋に至らば恩賞は乞ふに任せん能くせようと宣へば當麻太郎は七首を左右

の手に受取て三遍拝舞き腰に帯び君が為に家を忘れ命を捨るは武門の習慣かをうなの事と賞せられて寶刀を賜へる君恩をいかでか忘却仕まつらん幕下のおん旨を知り得るまでも再て見参に入り候らんと誓を立て退出せり知らずや是ぞ君臣が一世の別れは伽羅丸の双に劔る禍害の種を蒔しぞ浅猿しかれ恁て當麻は僅に一日を隔てまた基勝が許に趣き閑室にて對面しかの義は如何にと取敢ず問ひ基勝声を低め去ばあり聞たまへ昨日漸やく折と

當麻武弘
夜密に
鎌倉の
營中を
窺ふ
季頼助


當麻武弘

得て主人に呟き候ひしを蒲殿の悲歎足下の孤忠時政深く感賞し斯まで思ひたまへとあらば逆心なるを全くも思ひ侍らぬ去とて愁訴をたまへのみをて讒者の舌を弾くべき證據なくば詮なき業なり所詮讒者い誰甲斐ある幕下の賢慮い如何なりと知らまく思つゝ別に術なし御寝所の床下をどみ潜びて聞べ便宜得ふんあを吾りへ参た事みまくば明々地なる當麻太郎に告そと言ま たれども足下と吾とい交誼深き竹馬の朋友なるを之の事洩せーとよりや害みも成

まじと思ふ己が寸志のを是餘の事い力及ばず自ら尋思たまへと詞巧みに教唆されく當麻太郎い今更に靴を隔て痒を掻く心地いまれど強ても問いまを僅に便りを得たるーうべ空しく宿所に帰を獨りぢらく思ふやう吾廣通と争ひく負擔さまー密事を果さば加之ぞ伽羅丸の空刀を手自ら賜ひし時もし事成ぞん重ねて見参に入りとまで誓ひし事さへあるりのを絶に便宜を得たるのを以て其甲斐なくい彼に笑ふを君に對する面目な

し兎ても角ても難義なり虎穴に入ずんば虎の子い
獲ずと世の俚言も所以なる哉いかで密議を知
らんと時政主の意の如く宮中に潛び入て大床の
下にかくれ躲て聞みまゝあとあゝとうと浅墓に
思ひ決め夜ふく出て宮門の背面を徘徊しをさ
く隙を伺ふたり茲に至りて武弘が首尾よく事を
成さや什麼に次編に説と見て知れ

通俗日本小史四編之下終

大坂　前川源七郎　越後三條　青柳正兵衛
同　岡島真七　同　加茂　九屋音八
紀州和歌山　津田源兵衛　同　番場吉次郎
阿州徳島　坂井萬吉　同　中條　村山長太郎
遠州掛川　三原屋甚藏　同　長岡　山口萬吉
同　二俣　天井金藏　同　竹屋利七
三州豊島　泉屋兼藏　同　見附　浅間屋長七
尾州名古屋　永樂屋東四郎　同　嘉坪屋由右ヱ門
同　美濃屋代助　同　六日町　目黒宗内
同　中村重兵衛　同　瀉町　佐藤友吉
甲府山梨　内藤傳右ヱ門　同　新瀉　越中屋與八
同　五明堂正八　同　浅野六平
同　小西屋庄左ヱ門　加州金澤　近八郎右ヱ門

同　武川半七
駿州靜岡　今津美之助
同　大和屋利兵衛
相州小田原　曽比屋平七
同　翁屋重兵衛
同　厚木　高梨與左門
横濱弁天通り　池田孝吉
同　元町　田澤多一郎
武州熊ヶ谷　近江屋平吉
同　杉浦平左門
下總佐原　好文堂正平
同　境町　高木直二郎
上總東金　北村甚左門

同　木屋平八
同　柚木甚兵衛
同　岡本榮作
磐城三春　中村嘉兵衛
同　西村重兵衛
岩代若松　齋藤八四郎
同　福島　近江屋周助
同　光白屋清次郎
同　都田誠
同　白根屋藤五郎
同　島屋兼吉
同　萬屋長五郎
羽前山形　十一屋源助

豆州三島　堺屋又三郎
常州太田　會津屋茂兵衛
野州足利　小木屋金太郎
同　中村宗兵衛
同　今市　吉田屋長兵衛
上州前橋　橋本屋文次郎
同　伊勢崎　川本屋平吉
同　高崎　亀林屋卯兵衛
同　富岡　關文堂文次郎
同　沼田　塚田屋佐太郎
同　藤岡　松野屋貞吉
同　伊香保　小林源二郎
信州長野　小林屋喜太郎

同　米澤　島田為次郎
同　谷地　長谷川虎三郎
同　上ノ山　田宮五郎
同　萬屋利七
羽後秋田　本間金之助
同　角屋直治
同　松峯　能登山五右衛門
同　陸中石巻　佐々木長藏
同　三陸屋利兵衛
同　一ノ関　及川甚七
同　牟岐鉄五郎
同　壺屋養藏
同　盛岡　澤田正助

同　萩原磯左門　同　八戸　石岡吉十郎
同　上田池田政教　同　仙臺　渡邊善七
同　鼠屋甲造　陸奥弘前　菊地正助
同　蔦屋伴五郎　同　青森　柿崎忠兵衛
同　松本擬屋重兵衛　同　渡島函館　菊地儀三郎
同　精草堂八十八　北海道小樽　魁文社
同　藤松屋禎十郎　同　札幌　佐々木常吉
同　水琴堂為吉　磐城南部　田村善兵衛
同　諏訪藤屋機左門　仙臺国分町　浦山太郎兵衛
同　同作四郎　越中高岡　山下平吉
飛騨高山桝屋重兵衛　越後三條　國本吉右工門
越後水原鳥屋六平　横濱　淺間屋傳右工門
同　三條樋口屋小左工門　岩見巳之助

版權　明治十四年四月三十日
免許　同十五年一月出版

編輯人　大阪府平民　渡邊義方　日本橋區濱町三丁目壱番地寄留

出版人　東京府平民　辻岡文助　同區横山町三丁目二番地

010190512903